

2021年4月11日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

イザヤ書 55 : 6~7

ルカによる福音書 13 : 1~5

「悔い改め」

<恐ろしい箇所?>

「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

今日の短い聖書箇所で、イエスさまは二回、このように言われました。

何だか怖い。脅されているようだ。そう思われた方があるかも知れません。こうしなければ、滅びる。こうしなければ、救われない。そんな風に聞こえます。

でも、わたしたちは、罪深いにも程があります。悔い改めたと思ったら、またすぐに神さまに背く。神さまに従おうと決意したかと思えば、気付けば自分中心になっている。そんな歩みを繰り返しています。そうであるならば、いったい誰が滅びずに、救われるのでしょうか。

ですからこれは、何かわたしたちが「悔い改める」という条件を満たさなければ、滅びるぞ、救われないぞ、という教えではないのです。

では、どういう意味でイエスさまはこのことを語られたのでしょうか。

<今の時>

1 節は「ちょうどそのとき」という言葉から始まります。それは、前回の 12 章の終わりの部分と繋がっているからです。

12 章の最後の部分の御言葉を聞いたのは二週間前ですが、そこでイエスさまは、わたしたちは皆、今のこの時、神さまの御前に出る日に向かって歩いている、ということを教えられました。神さまの御前に出る日、というのは、神さまがわたしたちを裁かれる、終わりの日のことです。しかも、それは、今わたしを訴えようとしている人と共に、その裁きの日に向かって歩いているということです。

そんなあなたがたは、今の時がどういう時か見分けなさい。何が正しいかを判断しなさい。イエスさまはそう教えられたのでした。

それはつまり、わたしたちは、終わりの日に神さまの裁きの前に出る者であること。そして、自分が神さまに対して、また隣人に対して、罪の負債を抱えていることを自覚しなさい、ということです。

しかもこの罪の負債は、自分では払い終えることが出来ないほどに膨れ上がっています。だから神さまは、わたしたちをこの罪の負債から解放するために、救い出すために、御子イエスさまを遣わして下さったのです。

そして今、人々の目の前に立っておられるイエスさまは、言われます。「今、あなたがた

の前に、あなたの罪を担うためにわたしが来たのだ。だから、裁きの日が来るまでに、あなたを罪も丸ごと、わたしに委ねなさい。罪の赦しを与えようとしておられる、この神さまの救いへの招きに応じて、わたしに従いなさい。わたしを受け入れ、わたしの救いを受け取りなさい。」そう言って、恵みへと招いて下さったのでした。

#### <因果応報？>

今日の1節は、このイエスさまの話聞いた、「ちょうどそのとき」です。

そこに何人かの人に来て、イエスさまに言いました。「ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜた」。

ピラトとは、時のローマ帝国のユダヤ総督です。このピラトが、ガリラヤ人、つまり、ガリラヤ地方に住むユダヤ人が、神殿でいけにえを献げて礼拝をしようとしていた時に、彼らを殺した、ということのようです。いけにえを献げる神殿の敷地内で殺されたことを、「ガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜた」と表現しているのです。

さて、これを告げた人々は、どういう思いでこのことをイエスさまに告げたのでしょうか。

それは、その後のイエスさまの御言葉で分かります。2節でイエスさまはこうお答えになりました。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。」

つまり、イエスさまにこのことを告げに来た人々は、殺されてしまったガリラヤ人は、ほかの者よりも罪深かったから、神さまの裁きに遭って、こんな残酷な死に方をしたのだ。殺されたのは、罪に対する罰であり、そうやって神さまに滅ぼされたのだ。そう思っているということです。

続けてイエスさまが語られたことも、同じことを指しています。4節「また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。」

どうやらシロアムという場所で、塔が倒れて十八人が亡くなってしまう事故があったようです。突然の災難。思いもよらない事故。これも当時の人々は、その亡くなった十八人は、ほかのどの人々よりも、罪深い者だったから、裁きとして、罰として、こんな目に遭って滅ぼされたのだ。そう思っているということです。

この考え方は、典型的な因果応報の考え方です。過去の良い行ない、悪い行ないによって、それに応じた報いを受ける、という考え方です。現在起こっていることは、過去の行ないに何か原因があって、その結果として生じている、という理解です。

苦しみや、悲惨な出来事、不条理な事。それは過去にその人が何か悪を行なったから、罪を犯したから、その結果として起こったのだ。イエスさまにこれらのことを告げた人々もまた、そう考えていたということです。

彼らはこう思ったのです。「イエスさまが、わたしたちは皆、罪を裁かれる神さまの御前

に向かって、歩いているところだとおっしゃった。だからこそ、今、ちゃんとしなければ、ピラトに殺されたガリラヤ人のように、報いを受けて、裁かれて、滅ぼされることになるのですね。」そう言っているということです。

そして、この考え方は、実はわたしたちの中にも、深く根付いているように思います。

悪いことをした人が何か酷い目に遭うと、少し胸がスツとして、「あれは自業自得だ。普段悪いことをしているから、自分に帰ってきたんだ」と思うこと。一方で、普通の生活をしてきた人が悲惨な出来事に遭ったなら、「あの人はあんなに優しく、良い人だったのに、どうしてこんな目に遭わなければならないのか」と考えること。あるいは、自分に病気や、何か辛いことが起こった時に、「真面目に生きてきたのに、どうしてこんな苦しみを味わわないといけないのか」と理不尽に思うこと。

これらも明らかに、因果応報の考え方ではないでしょうか。

悪いことをした人は、酷い目に遭う。真面目で良い人は、幸せになる。そうだとしたら、確かに世の中、分かりやすいと思います。

でもわたしたちは、実際そうではないことを、何度も見聞きしてきたのではないのでしょうか。悪人が金持ちになって悠々自適に過ごしていたり、本当に真面目で誠実な人が、何だか苦勞ばかりしていたり。

そして、そういうことを、因果応報の考え方にすっかり馴染んでいるわたしたちは、不平等だ、理不尽だと感じるし、納得できずに、怒ったり、嘆いたりするのです。

<決してそうではない>

しかしイエスさまは、このような考え方を、きっぱりと否定されます。イエスさまははっきりと、二回、同じ言葉で言われました。「決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

イエスさまは、苦しみや悲惨な出来事に遭う人は、他の人よりも罪深かったからではない。「決してそうではない」と言われました。

それなら、わたしたちは、どうして苦しみや悲惨なことが起こるのか、と問いたくなります。しかし、イエスさまは、その理由はお答えになっていません。

イエスさまは、まずここで、わたしたちが、この人は誰々より罪深い、この人は誰々よりは良い人だと、人の罪を勝手に判断することを否定されます。それは、わたしたち人間がすべきことではありません。

そして、わたしたちの人生に起きる苦しみや、悲しみや、悲惨さを、罪の結果として結びつけるな、と言われます。わたしたちの人生の出来事は、わたしたちの行いによってコントロールされているものではありません。そして実際、理不尽なこと、不条理なこと、納得できないようなことは、人生の中に満ち溢れているのです。

イエスさまに、ガリラヤ人が殺されたことを告げた人々は、彼らが罪深いからそうなったのだと決めつけ、悲惨な死を、彼らの罪と関連付けました。そして、悲惨な死は、神さまの裁きであり、罪のための「滅び」であると考えました。

しかし、イエスさまはおっしゃったのです。「決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

イエスさまは、誰でも、悔い改めるのでなければ、皆滅びるのだ、と言われました。

この世で起こる様々なこと、それは、災難や、悲惨なことや、不運と呼ばれるようなものであっても、それが人の罪に対する罰であったり、人の「滅び」を意味しているのではない、ということです。

神さまによって罪が裁かれ、その判決を受けるのは、終わりの日のことです。どの人間も、誰も、あの人は滅びに値するとか、罪深いとか、救われるとか言うことは出来ません。人の罪をお裁きになるのは、ただお一人、神さまだけです。

だから、これは一方で、今平穏無事に暮らしている人でも、幸せな毎日を送っている人でも、それは罪がなくて、善い人だから、そうなのではない、ということです。罪が軽い結果、そのような幸いが与えられているのではないのです。

その人も、来たるべき終わりの日、裁きの日が来て、神さまに対して罪を犯しているならば、滅びるのです。「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」のです。

#### <悔い改め>

ですから、「滅び」というのは、わたしたちのこの世での悲惨な死のことではありません。聖書における「滅び」とは、神さまとわたしたちの関係が絶たれること、切れてしまうことです。

わたしたちは、神さまに命を造られ、生かされ、導かれている者です。この、命の源、すべての源流である神さまから離れて、本来、わたしたちは生きられません。

「罪」というのは、神さまに背き、神さまから離れることです。命の源である神さまから、自ら離れてしまうならば、「滅び」へ向かうのは当然のことです。

ですから、イエスさまは言われるのです。悔い改めなさい。神さまの許に立ち帰りなさい。命の造り主、あなたに命を与え、支配し、生かす方の許に、帰ってきなさい。

苦しみにある者にとっても、喜びにある者にとっても、この招きは変わりません。イエスさまは、この招きを告げるために。そして、わたしたちが悔い改めて、神さまに立ち帰る道を拓いて下さるために、来て下さったお方なのです。

わたしたちの救いとは、苦しみや悲しみがなくなることや、平穏無事な生活をするものではありません。この神さまの許で生きること。造り主である神さまのご支配の下に、神さまと共に生きることこそ、救いなのです。イエスさまと共に歩むということが救いなのです。

#### <神さまの御心>

でもやはり、わたしたちは、なぜ神さまが共にいて下さるのに、苦しみに遭うのか。悲惨

なことが起きるのか。人は悲しんだり、嘆いたり、倒れたりしなければならないのか。そう問いたくなるかも知れません。

でも、結局どんな理由をつけても、どんな説明をされても、わたしたちは納得することなど出来ないでしょう。そういう理屈がつくことや、原因が分かることが、わたしたちの苦しみを和らげたり、癒したり、慰めたりすることにはならないのです。

苦しみや、悲惨な出来事が起こる理由は分かりません。でも、そういったことが、わたしたちの人生に度々起こることは確かです。

そしてその時、わたしたちは、神さまはわたしが苦しんでいるのをご存知なのに、放置しておられるのだろうか、疑ってしまうことがあるかも知れません。悲しみが続くのは、神さまに嫌われているから、見捨てられているから、と思いつつも分かりません。神さまがわたしを痛めつけようとしておられる、と考えるかも知れません。

でも…決してそうではありません。わたしたちは、神さまになぜ、と問います。そしてその答えは、わたしたちが自分の苦しみや悲しみばかりを見つめていても分からないのです。

神さまが何を考えておられるのか。神さまがわたしをどうされたいと思っておられるのか。それを知りたいなら、わたしたちは、神さまが遣わされた御子イエスさまを見つめなければなりません。このお方は、神さまの御心をわたしたちに示すために遣わされた方だからです。

神の御子イエスさまは、まことの人となって世に降り、わたしたちの罪をすべて背負って、十字架に架かって死なれました。これが、神さまのわたしたちに対する御心です。神さまは、わたしたちが罪によって滅びることのないように、イエスさまに、わたしたちの罪の負債を、すべて背負わせられたのです。

神さまのわたしたちに対する御心とは、あなたを生かしたい。あなたが滅びることを望んでいない。あなたがわたしの許に帰ってくるのであれば、わたしと共に生きるようになるのであれば。その罪の負債を贖うために、わたしの独り子の命をも与えよう。

それが、神さまのわたしたちに対する思いです。御子の命を惜しまずに与えて下さるほど、わたしたちを愛しておられる。それが、神さまの御心です。

そしてイエスさまは、この神さまの御心に従って、十字架に架けられて死なれたのです。わたしたちの罪の負債を支払うためです。わたしたちを滅びから救い出すためです。

そして、この御子イエスさまを、神さまは十字架の死の中から復活させられ、罪の贖いが成し遂げられたこと。また、復活と永遠の命をわたしたちに与えて下さることを、お示し下さったのです。

わたしたちがこの世の中で、苦しみに遭う時、悲しみに遭う時、また死に直面する時も、この御子イエスさまが、わたしの負債も、苦しみも、悲しみも、死も、そして滅びも、すべて担って下さり、いつも共にいて下さるとの約束が与えられています。イエスさまの復活の命が、イエスさまに身を委ねた時から、いつもわたしたちの内に注がれています。終わりの

裁きの日にも、イエスさまが、その裁きの場に共に立って下さり、この者の罪は、わたしがすべて償った。この者の罪は赦されている。そう宣言して下さいます。

#### <まことの救い>

神さまに生かされていること、愛されていること、新しい命を頂いていること。ここに人生の、まことの喜びと希望があります。ここに、救いがあります。

たとえ世の生活が、人からは悲惨な歩みに見えたとしても、その人が、自分の人生はイエスさまと共にある、ということを知っているなら。自分はイエスさまの命に生かされていると知っているなら。それは誰よりも、最も幸いな人生を歩んでいるのです。

この救いに生かされるならば、穏やかで豊かな日々は、神さまから与えられた恵みとして感謝する者となり、また苦しみや困難の時には、神さまにますます依り頼む者とされます。

すべては神さまのご支配の下にあり、すべての救いと恵みは神さまから来ると知っているからです。神さまが、復活の命の中に、そして、ご自分の救いのご計画の中に、わたしを生かして下さいっていると信じるからです。たとえ苦しみや悲しみが起こったとしても、神さまは必ず愛をもって、わたしたちを恵みの下へと導いて下さると信じる事が出来るからです。

そしてそれは、直面している苦しみや困難に、自分が願うような解決が与えられる、という意味ではありません。神さまの恵み、神さまの救いのご計画とは、わたしたちがますます神さまに近付き、ますます神さまに頼って歩む者になる、ということなのです。

わたしたちは、穏やかな日々よりも、人生の苦しみや困難の時ほど、神さまに祈り、神さまを求め、神さまに向き合うかも知れません。そして、そのように神さまと相対するところでこそ、わたしたちは神さまのわたしたちへの思いを、より深く知らされていくのです。わたしの悲しみをイエスさまも悲しみ、わたしの苦しみをイエスさまも苦しみ、わたしの恐れをイエスさまも恐れて下さったということ。わたしの罪と苦しみの最も悲惨なところに、イエスさまの十字架が立てられ、この方がわたしを担って下さっているということ。このイエスさまの許にこそ、苦しみや悲しみに対する慰めがあり、癒しがあり、救いがあることを知るのである。

イエスさまが共にいて下さる。神さまのご支配の中で生かされている。そう信じるところにこそ、わたしたちは、まことの拠り所を見出すのです。この世の苦しみの中にあっても、癒しを与えられ、慰めを与えられ、平安と希望を見出していくことが出来るのです。

「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば 豊かに赦して下さいます。」

神さまは、わたしたちが悔い改めることを、神さまの許に立ち帰ることを、ずっと待っておられます。

これは、わたしたちの「悔い改め」という行為が、救いの条件だと言っているのではありません。救いはもう差し出されているのです。目の前にあるのです。イエスさまが、もう恵

みを携えて、わたしの前に立っておられるのです。

わたしたちが、そこからそっぽを向かず、イエスさまが差し出して下さった恵みを両手でしっかりと受け取ること。神さまの方にしっかりと体を向けて、神さまの愛を受け取ること。それが悔い改めであり、そこに救いがあるのです。

神さまは、罪の赦しを与え、新しい命を用意し、両手を広げて、いつでもわたしたちが帰ってくるのを待っておられます。命の源である神さまの許に立ち帰りなさい。わたしたちは今日のところから、この悔い改めと救いへの招きを聞いているのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたから離れ、罪に捕らわれているわたしたちを、悔い改めへと招いて下さること。そのためにイエスさまを遣わして下さり、十字架の御業によって、わたしたちの罪と滅びを担わせて下さったこと。わたしたちを、それほどまでに愛し、惜しみ、罪の赦しを与えて下さり、復活の命に与らせて下さること。この大いなる恵みを、心から感謝いたします。

わたしたちは、人生に起こる苦しみや、悲しみや、困難に翻弄され、そのことばかりを見つめてしまいます。あなたに目を向けることを忘れ、ますますあなたから離れようとしてしまいます。どうか、イエスさまの十字架と復活の恵みを見つめる者として下さり、神さまの愛を知ることが出来すように。苦しみや悲しみの中にも共にいて下さり、わたしたちを慰め、支え、癒して下さるイエスさまがおられることを、信じる事が出来ますように。

あなたの御許に立ち帰って、神さまが共にいて下さる。このまことの幸いに生きる者となることが出来ますように。

救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン